2016年2月28日

福音書からのメッセージ

園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。
（ルカによる福音書13章8節）

イエス様は一つのたとえを語られました。

ある人がいて、ぶどう園にいちじくの木を植えました。でも三年たつのに、一向に実を結びません。そんな木など切ってしまえ、と木を植えた人は園丁に命じます。しかし園丁は切るのを待ってもらうようにと、その人に頼むという話です。

ぶどう園の所有者は、いちじくの木を植えます。ぶどう園にいちじくの木、一見不釣合いです。ぶどう園の主役はぶどうの木であり、いちじくの木は、ぶどう園ではよそ者です。ぶどうの木にしてみれば、何でこんな木が自分たちのそばに植えられたのかと思ってもおかしくはありません。

しかし、わたしは思います。わたしたちは今、神さまに集められています。そのわたしたちは、いちじくの木です。ぶどう園にはふさわしくない木だとしても、そこに植えられました。神の国にふさわしくなくても、その交わりの中に招かれたのです。

ではわたしたちは神さまの望みどおりに、実をつけることができるのでしょうか。神さまが求めたように、自分の力で実を結び、「神さまどうぞ、この実をお食べ下さい」と胸をはって言える人などいないはずです。三年たっても実をつけることのできないいちじくの木のように、いつ切られるのか、いつ斧を振りかざされるのか、わたしたちの心は怯え、恐れに捕らわれているかもしれません。

しかしそこでとり成しをしてくださる人がいます。「たとえ話」の中では園丁、わたしたちと神さまとの関係の中ではイエス様です。

彼は言います。「このままにしておいてください」と。彼は木を切り倒さずに、そのまま待っておいてほしいと、取り成しをします。一年待てば状況は変わるのでしょうか。そんな保証はまったくありません。しかし園丁は、いちじくの木のために働きます。木の周りを掘って、肥しをやるのです。

肥料を空からばらまくのではありません。1本のいちじくの木のために、その周りを掘って肥料を与えます。想像してみてください。木の周りを掘るときに、どうするのか。根っこを傷つけないように、丁寧に掘るはずです。その木の元に膝をつき、しゃがんでその木が実をつけるように、願いながら掘る姿。その姿こそが、わたしたち一人ひとりに対するイエス様のお姿なのです。

そして肥しを注ぎ込みます。わたしたちに対する肥しとは、イエス様ご自身です。イエス様は十字架によって、その身をささげられました。わたしたちが実を結ぶように、イエス様は自らを与えてくださいました。それがわたしたちに与えられた神さまの恵みなのです。

この大きな恵みに感謝し、実を結ぶことができるよう、願い求めていきましょう。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/